

<b>授業科目名</b>	器楽演習（パーカッション）(2100124)		
<b>時間割名</b>	器楽演習（パーカッション）(14103)		
<b>時間割担当</b>	大西雅博		
<b>実施期</b>	前期	<b>単位数</b>	2 選択
<b>曜日・時限</b>	月・4		

### 授業の目標・概要

打楽器は教育現場において、授業での器楽合奏をはじめ吹奏楽・アンサンブル・マーチング等においても大変重要な役割を担う。ただし、楽器の種類も奏法も多種多様で、経験者でなければ指導が困難である。授業では、一つの楽器についての技術を追求していくことよりも、幅広く打楽器に触れ本来の音色を体感することに重点を置く。叩けば音が鳴る打楽器であるが、音楽的效果を高める音色を奏するためには、どのようなテクニックを用いれば良いか、その奏法について研究する。また、打楽器アンサンブル演習において、それぞれの楽器をどのようなバランスで演奏すると、音楽的效果を高めることができるのかを研究し、総合的な音楽性を養う。

### 学習の到達目標

世界中の打楽器の種類は、膨大なものであるが、教育現場で使用される頻度の高いものを選択し、その奏法について学習する。基本的な技術の習得は勿論であるが、重要なことはその技術を使って演奏した時に発する音色である。ジャンルの異なる楽器に数多く触れることにより、その楽器の持つ本来の音を把握し、音楽に合致したサウンドを選択できる技術と感性を養いたい。アンサンブル演習では、楽曲ごとに各楽器のセッティング・チューニングから始まり、音楽の様々な場面にふさわしい音色の追求や、その役割を果たすためのバランスを研究し、効果的な音楽の表現方法を学習する。そして、アンサンブルや個々の楽器の演奏で修得した技術と感性を生かし、将来指導者として音楽づくりを行っていく中で、生徒・児童に何を要求し、何を学習させるかを明確に把握してほしい。

### 授業方法・形式

実際に楽器を使用することにより、セッティングから奏法まで段階を経て体験し、個々の楽器の技術向上・音作りへと発展させる。そしてその技術をアンサンブル演習に生かし、演奏力・実践力を身につける。授業においては、時間内に練習をして上達させるのではなく、前回の課題に対する達成度の確認と修正を行い、今回の課題を明確にし、練習方法を学習する。楽器の種類が多く、演奏方法も多種多様であるため、授業外での各自の繰り返し練習が技術を向上させ、より効果を高めるための唯一の手段である。

### 授業計画

- 第1回 あらゆるジャンルの打楽器の種類、年代による楽器の進化、基本のリズムパターンについて学習する。第2回 基本奏法1：姿勢・スティックの持ち方・ストロークの種類について学習する。
- 第3回 基本奏法2：シングルストローク・ダブルストロークについて、その違いを学習する。
- 第4回 基本奏法3：アクセント・フラムアクセントの奏法について演習する。
- 第5回 楽器の奏法1：スネアドラム・ベースドラムの奏法について演習する。
- 第6回 楽器の奏法2：ボンゴ・コンガ・ジャンベ等、ラテン楽器の奏法について演習する。
- 第7回 楽器の奏法3：タンバリン・トライアングル・カスターネット・クラッシュシンバル・サスペンションシンバルの奏法について演習する。
- 第8回 楽器の奏法4：ティンパニの奏法について演習する。
- 第9回 楽器の奏法5：マリンバ・シロフォン・ピブラフォン・グロッケン等、鍵盤楽器の奏法について演習する（2本マレット）。
- 第10回 楽器の奏法6：マリンバ・シロフォン・ピブラフォン・グロッケン等、鍵盤楽器の奏法について演習する（4本マレット）。
- 第11回 楽器の奏法7：ドラムセット・カホンの奏法とリズムパターンについて演習する。
- 第12回 アンサンブル1：4人から8人のグループに分かれて、それぞれ楽曲を選曲し、グループ毎にアンサンブル曲に取り組む。
- 第13回 アンサンブル2：4人から8人のグループに分かれて、それぞれ楽曲を選曲し、グループ毎にアンサンブル曲に取り組む。
- 第14回 アンサンブル3：4人から8人のグループに分かれて、それぞれ楽曲を選曲し、グループ毎にアンサンブル曲に取り組む。
- 第15回 アンサンブル4：アンサンブル&ソロ演奏発表会。

### 成績評価の基準

平常点30%、学習意欲30%、課題達成度30%の3点と、アンサンブル&ソロ演奏発表会の実技点10%を合計する。

### 授業時間外の課題

授業においては、基本的な練習の方法を学習するので、繰り返しの練習は時間外に個人で行い、クオリティーを高める。アンサンブル曲の他に、個人がソロ曲を選択し、時間外に練習する。基本的に、授業内においてはソロの演習は行わない。

### メッセージ

打楽器は他の楽器に比べ、人間の本能の部分に近いのではないだろうか。技術も然ることながら、体内から湧き出てくるリズム感を大切に、演奏を楽しんでほしい。

### 教材・教科書

使用しない

## 参考書

使用しない